

葦名盛氏像について

若 林 繁

はじめに

会津葦名家中興の将といわれる盛氏は、大永元年（一五二二）に生まれ、天正八年（一五八〇）に六十歳で卒去した。そして小田山下（現会津若松市花見ヶ丘）の地に葬られた。¹ 現在でも、この地に葦名家廟所として塚が三つあり、中央を盛氏、左を盛興、右を盛隆の墓と伝え、その上に各一基の五輪塔が建っている。この墓については、『新編会津風土記』² 卷之三十二小田村墳墓の条に「四方に高三尺計の土居を回らし其中に塚二あり、東を盛氏の墓とし、西を盛隆の墓とす、共に五輪を建つ」と記されている。盛氏は、同じく「芦名の盛なる此時を第一とす」といわれているように、大いに葦名家の勢力を伸長させた。中通り地方の諸将は皆幕下に属し、あるいは北条や武田氏と心を合せ、度々佐竹、岩城氏と戦い、その間には上杉氏の隙を伺ったという。³ 盛氏の肖像彫刻は、『会津四家合考』などに「真像、今宗栄寺にあり」と記されているように、会津若松市天寧寺町の宗英寺に伝えられ、現在に至っている。そして大正九年に重要文化財に指定されている。この像の造立の経緯、あるいは伝来などについては、像の納められている厨子背面の刻銘や諸書に記載されており、ある程度知ることができる。従来、この像については、桃山時代の、没後の供養や報恩などのために武將の肖像を制作した風潮が地方に及んだ例として、簡単に紹介されているに過ぎなかった。⁴ しかし東北地方における戦国時代の武將の肖像彫刻で、この像のように造立年代などを明確にすることができるとは、あまりないと思われる。また葦名家の滅亡という不運に見舞われながら今日まで

伝えられたことは、稀有のことと考えられ、その伝来にはこの肖像彫刻の歴史的意義が包蔵されているように思われる。先年、この像について詳しく調査する機会にめぐまれたので、ここに改めて紹介しようとするものである。

一 像の概要

葦名盛氏像は、像高が二六・七cmである。⁵ 両眼を見開き、口を閉じ、筒袖衣をつけ両腕を前に出す。左手はやや下げ、掌を内に向け第三、四、五指を軽くまげ、右手は五指をまげる。袴をつけ、両足とも袴の内に入れ右足を上にして坐す。左手の第一、二指先、袴の腰紐の一部を欠失し、漆塗りの一部が剝落しているが、現状では他に大きな損傷はない。そして内部に漆箔を施した、木造黒漆塗の厨子に納められている。

頭部は、現状では剃髪しているようにみえる。剃髪しているか否かは像主の年齢、また表現上の特色にも関わってくると思われるので、盛氏の隠居、出家の年代を考えておきたい。「葦名系譜」⁶ によれば

子息盛興ニ讓黒河城、岩崎築新城移ル、後ニ盛興先父薨ス、因テ無子息、亦黒河城へ飯リ、剃髪号止々斎

とあり、盛氏は子息盛興に家督を譲り、岩崎に新たに城を築き、一度隠居するのである。しかし盛興の死によって、再び黒河城へもどっている。岩崎の城とは、向羽黒山城（現大沼郡本郷町）のことと、『新編会津風土記』⁷ 卷之七十二本郷村古蹟 向羽黒山城趾の条に

永祿四年経営の事を始め、数年の後城築の功成て此に隠居し、止々斎と

号せしとぞ

とあり、永祿四年（一五六二）より築城がはじまった。完成は、同書及び『会津旧事雑考』永祿十一年の条所載の「巖館銘」から永祿十一年（一五六八）のことと考えられる。そうすると盛氏が隠居したのは、永祿四―十一年の頃となろう。喜多方市関柴町勝福寺の鐘銘に、「大旦那平盛興並隠居盛氏」とあり、この鐘の鑄造には盛氏父子が大旦那となっていることがわ



図1 草名盛氏像 正面 宗英寺蔵

かる。ここで盛氏は、「隠居」と称している。この鐘は、同じく銘から永祿七年（一五六四）に鑄造されていることがわかり、盛氏はこの頃すでに家督を盛興に譲り隠居していたことがうかがえる。さらに伊達氏との講和の際に書かれたと考えられている、永祿九年（一五六六）正月十日の伊達輝宗に進呈された盛氏の起請文には、「止々斎」と署名されており、その包紙には「入道止々斎」とある。この頃までに盛氏は出家して、止々斎と号していたことが知られるのである。盛氏の隠居から出家に至る年代を考えてみると、永祿四年、向羽黒山城の築城を始めた頃に隠居したと考えられる。むしろ隠居して向羽黒山の新城の造営を始めたと考えられ、盛氏の隠居は永祿四年の頃と見られるのである¹⁰。隠居と同時に、あるいは程なくして、遅くとも永祿九年までには出家していたものと思われる。永祿四年を隠居の年とするならば、盛氏は大永元年（一五二二）の生まれであるから、四十一歳で隠居したことになり、けっして早い年齢であるとは思えない。この肖像彫刻が頭部を剃髪した、すなわち盛氏の出家後の姿を写しているものとするならば、年齢的には四十一歳を過ぎた頃の姿をあらわしていることになろう。しかし盛氏像の後頭部を子細に観察すると、下方が一段高く彫出され、その上方中央は三筋にわたって彫り窪められている。剃髪した頭部をあらわすならば、このような彫出は不要で平滑に仕上げれば事足りるであろう。頭骨の形を忠実に模したにしては、形体的に不自然である。この段状の彫出は頭髪の一部を表現したものと見做され、上方の三筋の彫り込みの中央に別材製の髻を矧付けていたものと考えられる。その髻が欠失し、正面からみると剃髪した頭部のような形となったものと思われるのである。さらに衣服も、武将の平常の装いである。頭髪があり、俗体形であるならば、この像は盛



图3 同前 右斜



图2 同前 左斜



图5 同前 右侧面



图4 同前 左侧面

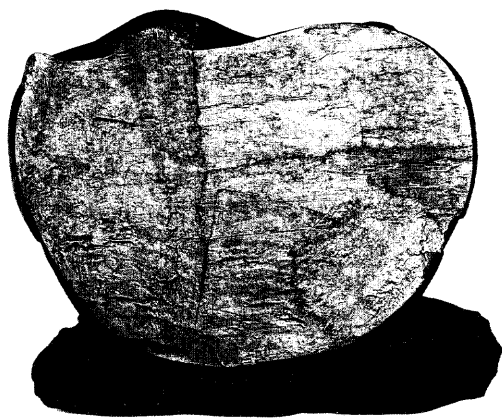


図7 同前 底面



図6 同前 背面

氏の隠居、出家以前の姿を造形化したものとなろう。すなわち隠居した四十一歳以前の、武威を四隣に耀かし、中通り地方の諸将までも従えた盛氏の、もっとも充実した年代を表現したものと考えられるのである。目鼻立ちが大きく、口をしっかりと結び、頬骨の張ったお顔には、形式化しているとはいえ、精悍な表情がうかがえるであろう。

この像の材質は檜で、構造は寄木造で、彫眼、漆塗り彩色仕上げとしている。頭部を一材で彫出し、襟の線（か）で挿し首とする。体幹部は両肩前を通る線で、前後に二材を矧ぐ。内刳はない。脚部は横に一材を矧ぎ、袴先を矧ぐ。両手上膊部半ばより先に各一材を矧ぎ、両手首を各袖口にそれぞれ挿し込み矧とする。背面腰部に小材を矧ぎ足す。彩色は現状では、上衣には漆塗りに正背面とも九弁小花文、袴には竹の葉文がそれぞれ金泥で描かれ、これらの文様のみが際立っている。しかし頭部、咽喉部には肌色がみられ、さらに白眼、下衣の襟及び袖口に金泥彩が残り、下衣の両袖口内側には胡粉彩が施されている。注目されるのは袴の結び紐で、背面寄両脇より腹前の結び目まで布製の紐が巻かれており、その上に漆をかけてとめている。現状では漆塗の地味な印象を受けるが、当初は肉身部が肌色で両眼や下衣の襟や袖口に金泥彩が施され、色彩的にも現実感のある表現がとられていたものと考えられる。なお、現在の畳座は昭和三年の修理時に新たに作られたものである。

二 造立の経緯及び趣旨

盛氏像の造立年代や造立の趣旨については、この像の納められている厨子の、特に背面に刻まれている銘記によって知ることができる。厨子の刻銘をすべて掲げると以下ようになる¹¹。

〔背面刻銘〕

歸命（胎藏界大日報身真言）三寶守護所

粵天正八季庚辰六月十七日蘆名盛氏公竹巖庵主

依御逝去奉造立木像御影於當院令安置処也



図8 同前 重名盛氏像と厨子

偏頭落命地有繁一世令報謝恩顧者也依之後代
大檀越并寺住之法主影前礼贊無懈怠者弥以可
為繁榮者乎
竹巖宗関庵主

願主權大僧都有繁東館之内宝壽院 欽志



図9 同前 厨子背面

〔左扉内側刻銘〕

桓武天皇十一代佐原十郎左衛門尉

義連十六代

三浦重名修理大夫平朝臣盛氏

〔右扉内側刻銘〕

天正八歳

◎瑞雲院殿竹巖宗関庵主

辰 六月十七日

厨子背面の刻銘により、盛氏は天正八年（一五八〇）六月十七日に逝去し、諡号は竹巖宗関庵主であることがわかる。そしてこの像は盛氏の逝去後、

まもなく造立されたものと考えられる。同じくその趣旨は、以下の三つであつた。

一 願落命地

二 有繁一世令報謝恩願者也

三 依之後代大檀越并寺住之法主影前礼贊無懈怠者弥以可為繁榮者乎

すなわち盛氏の落命の地を願らかにすることが第一で、落命の地とは盛氏を葬った小田山下の地をさすものと思われる。第二にはこの像の造立の願主となった、有繁一世の盛氏の恩願に対して報いるためであつた。そして第三に後代の大檀越、すなわち草名家とこの像を安置する寺院の住職がこの像を常に礼賛し、両者のますますの繁栄を祈っているのである。

願主である宝寿院の有繁は、『会津旧事雜考』によれば、まず元亀三年（一五七二）に金山谷玉無村（現大沼郡金山町）常楽寺を復興している。同じく天正八年六月には八角宮（現会津若松市宮町）の鐘を鑄造している。さらに『新編会津風土記』巻之十八鳥居町伊舎須弥神社別当亀福院の条に

天正の頃阿闍梨有繁と云僧当社の別当となり再び絶たるを継けり初は宝寿院と云何の頃にか今の号に改む

とあり、真言宗の亀福院、すなわち宝寿院を再興している。宝寿院は、現在の八角神社のあたりにあつた寺で今はない。また伊舎須弥神社は、同書に「宮を号して八角と云」とあるように、八角神社のことで、先の八角宮鐘鑄造も宝寿院の再興と一連のこととしてとらえられよう。さらに有繁は、同じく『新編会津風土記』巻之十八野伏町（現会津若松市上町）円満寺の条に

有繁と云者力を竭し願庵を修理し堂塔を再建し旧觀に復せりこれを当寺の初祖とす

とあるように円満寺の再興をも成し遂げている。有繁は天正の頃には宝寿院に住し、この寺や常楽寺、円満寺などの再興に尽力したことがうかがえるのである。そして有繁のこのような再興事業に、盛氏が少なからぬ援助を与えていたことは十分に推察されるところである。盛氏の寺社に対する

寄進は、先の勝福寺鐘鑄造の大檀那になっていることによっても知られるが、諏訪神社（現会津若松市栄町）の鉄燈籠¹²鑄造の大檀那になっている。さらに滝沢寺（現会津若松市一箕町）に鰐口¹³を寄進している。諏訪神社鉄燈籠が永祿四年（一五六二）、勝福寺鐘が同七年、滝沢寺鰐口が同九年の鑄造であり、これらの寄進が永祿四年以降に頻出し、盛氏の隠居、出家の年代とも一致しよう。殊に盛氏は禅宗に帰依し、天寧寺九世仁庵諱善恕には永楽錢百貫文を寄付したといわれる¹⁴。このように信仰心が深く、会津の寺社に数々の寄進を行なっていた盛氏であるならば、有繁に対する経済的助力は当然あつたことと思われる。それが趣旨の第二の「有繁一世令報謝恩願」という言葉にあらわれてきたものとも解することができよう。しかし「有繁一世」の表現をみると、単に数カ寺の再興に対する援助とその恩に報いるのみでは、いかにも盛氏と有繁の關係が稀薄なように思える。一世の恩顧であるならば、より長い親密な結び付きが両者の間に存在していたのではないかと考えられるのである。

盛氏像造立、安置のことは、諸書に記載がある。『異本塔寺長帳』慶長七年の条には

先年草名盛氏ヲ号瑞雲院盛氏ノ僮一人薙髮ノ祐玉ト云此道心盛氏ノ刻像結草庵一名瑞雲院像ヲ安置ノ守

とある。また『会津旧事雜考』慶長七年の条にも

是天正庚辰草名盛氏薙髮瑞雲院刻像安置祐玉（是盛氏僕也為薙髮奉焉

とあり、ほぼ同様の内容を伝えている。すなわちもと盛氏の下僕で、剃髪して僧となった祐玉が、盛氏の像を刻み瑞雲院という草庵を営み、その像を安置して守っていたというのである。厨子背面の刻銘では、「奉造立木像御影於當院令安置処也」とあり、さらに「願主權大僧都有繁東館之内宝壽院」と明記されている。盛氏像の造立は、有繁によって成就されたことは、この銘記により明らかなことである。では『異本塔寺長帳』以下に記す、盛氏像を刻し安置した祐玉とはいかなる人物であつたのか、疑問のもたれるところである。有繁と祐玉とは同一人のことで、『異本塔寺長帳』な

どでは、あるいは出家直後頃の、いまだ僧綱位を得る以前の名が記録されたものではなからうか。初名祐玉といい、真言宗の僧となり宝寿院や円満寺などの再興を精力的に遂行していく頃には、すでに有繁と名を改めていたものと考えられるのである。厨子背面刻銘には、盛氏像造立時点での僧名が記され、『異本塔寺長帳』などの盛氏像造立の記事には、盛氏と祐玉との間柄を明示するために初名とも考えられる「祐玉」の名が伝えられたものではなからうか。そうすると有繁は、もとは盛氏の下僕であった。『新編会津風土記』巻之七十三穂谷沢村源慶寺の条に「天正の頃祐玉と云僧あり、彼はもと草名盛氏の草履を取りし下部なり」とあり、盛氏の身辺に仕えていたものと推察される。厨子背面刻銘中の、造立趣旨の第二の「有繁一世令報謝恩顧」とは、盛氏に仕え、後に剃髪して僧となった有繁個人の、生涯を通しての盛氏に対する報恩の意が込められていたものと考えられる。盛氏と有繁とは、有繁の在俗のときより深い縁由があり、それが「有繁一世」という表現にあらわれてきたものと思われるのである。

さて造立された盛氏像が、盛氏の法名である瑞雲院という名の草庵に安置されたことは、先述の『異本塔寺長帳』などの記載により明らかである。ところが厨子背面刻銘中の「當院令安置」とある「當院」とは、銘記中では宝寿院をさすものと解される。盛氏像造立の願主である有繁の住持する寺は、宝寿院であった。少なくとも、有繁は銘記を草した時点で、自らが再興した宝寿院に盛氏像を安置し守っていくとする個人的な意図があったものと思われる。盛氏像の終局の安置場所が宝寿院であるならば、諸書に記される瑞雲院とはいずれの寺、あるいは草堂をさすのであろうか。宝寿院が瑞雲院と名を改めたことは、どこにも記載がない。盛氏が小田山下の地に葬られたことは前述したが、小田山と宝寿院のあった現在の八角神社（現会津若松市宮町）のあたりとは、同一地域内に納まる範囲とはいえずや距離的に隔たりがある。厨子背面刻銘中の造立趣旨の第一は、「顕落命地」であった。これは小田山下の地に葬られた盛氏の墓所を明確にすることであると解された。地域を広くとれば宝寿院の地も、この趣旨

に沿っていると認められないこともないであろう。しかし趣旨の第一をより具体化する地は、やはり小田山下に求められなければならないであろう。造立当初、盛氏像は宝寿院に安置されていた。やがて『新編会津風土記』巻之二十天寧寺町宗英寺の条に

盛氏卒し瑞雲院殿竹岩宗関大庵主と諡し南青木組小田村の地に葬り
小田村の条下
に併見るへし影堂を造営して盛氏の木像を安す

とあるように、小田山下の地、すなわち現在の草名家廟所のあたりに盛氏像の影堂が造営され、そこに安置されたものと考えられる。この影堂は、『異本塔寺長帳』や『新編会津風土記』源慶寺の条に、「草庵」と記されているように、小さな一堂に過ぎなかったものであろう。ここで広く盛氏の落命の地が、顕彰されることになったものと思われる。そして影堂である瑞雲院に住し、盛氏像の前に礼賛を怠ることなく守り続けたのは、有繁自身であったと考えられる。盛氏の卒去後、有繁は自ら造立した盛氏の木像に、今度は仕えることになったのである。そこには下僕として生前の盛氏に仕えた有繁の姿を重ねることができであろう。自身の仕えていた頃の盛氏の姿が、有繁の脳裡にはずっと残っていたものと思われる。そのような心情を反映して、実際に盛氏の肖像を造立するにあたっては、有繁の仕えていた頃の盛氏の姿が造顕されたものではなからうか。それは前述したように、盛氏の隠居、出家以前、その威勢を中通り地方にまで及ぼした、草名家のもっとも勢力のあった時代、その時代を築いた盛氏の活力に満ちた姿を写したのと考えられる。そして一層の草名家、及び会津の繁栄を、この像に祈ったものと思われるのである。

三 盛氏像の流転

小田山の瑞雲院に祠られた盛氏像は、ここに安住の地を得たかにみえる。しかし草名家は盛氏以後、次第に衰亡への途をたどりはじめ、盛氏像にも流転の歴史が訪れることになるのである。その前に盛氏以後の、草名家の家系についてここで一瞥しておきたい。

盛氏が子息盛興に家督を譲り、一度隠居したことは前述した。盛興が父に先立って卒去し、再び盛氏が黒川城にもどり政務をとるのである。そして盛隆が次に家督を嗣ぐのであるが、『葦名家譜』¹⁵によれば、彼は須賀川二階堂遠江守盛義の子であった。しかし盛隆は寵臣大場氏に弑せられ、その子亀王丸も早世してしまふ。ここで再び葦名家の家系は絶えようとするのであるが、佐竹義重の次男である義広（後に盛重と改む）を養子に迎え、家督を嗣がせるのである。葦名家の不運は、こればかりではなかった。天正十七年（一五八九）に義広（盛重）は、伊達政宗と磐梯山麓の摺上原で戦い、敗北して黒川城に逃げもどり、さらに自分の本家である常陸の佐竹家に落ちのびる。盛氏像の流転も、ここからはじまるのである。

『異本塔寺長帳』慶長七年の条に

于時主人義広敗北ノ佐竹落祐玉モ此ノ像ヲ負テ佐竹ニ行

とあり、『会津旧事雑考』や『会津鑑』にも同様の内容を伝えている。常陸における義広（盛重）は、『寛政重修諸家譜』巻百二十九の佐竹義勝（初義広盛重）の条に

天正十七年六月（中略）黒川の城保ち難く常陸国に帰る。十八年豊臣太閤より常陸国江戸崎領四万五千石をあたへられ、

とあるように江戸崎に四万五千石を領有していたことがわかる。摺上原の合戦で義広は敗れ常陸に落ちるとき、盛氏像もまた祐玉に負われて常陸に行くことになったのである。常陸では、義広（盛重）が江戸崎に所領を与えられていたのであるから、盛氏像も同じく江戸崎に安置されていたことと思われる。しかし江戸崎での安置状況については今のところよくわからない。その後、佐竹家は義宣の代、慶長七年（一六〇二）に常陸などの所領をことごとく没収され、出羽国秋田仙北二郡、さらに後に雄勝、平鹿など六郡の封地を充行われ、二十万五千八百十石余を領することになる。¹⁶そして義勝（義広）も兄義宣とともに秋田に移ることになるのである。先述の『寛政重修諸家譜』には

慶長七年兄義宣封地をうつさるゝのとき所領を没収せられ、家臣となる

とあり、さらに「葦名系譜」¹⁷義勝の条によりいくらか詳しくこの間の事情を知ることができる。すなわち

慶長七壬寅年義重公義宣公御遷封ノ砌、江戸崎没収、依は佐竹御同道ニテ出羽秋田へ御越、同年秋田城下ニ御住居、翌八癸卯年角館へ御引移、御知行一万六千石

とあり、義広（盛重）は佐竹家が遷封になったとき江戸崎の所領は没収され、慶長七年に秋田城下に居を構えるのであるが、翌年に角館へ移り、ここに一万六千石を知行することになり、佐竹家の家臣の列に加わってしまふのである。そして盛氏像も、義広（盛重）とともに秋田に行ったとしているのが、『異本塔寺長帳』で、その慶長七年の条に

又義広ハ改盛重移秋田此時モ祐玉像ヲ負秋田ニ行

とある。『会津鑑』、『新編会津風土記』も同様のことを記している。『会津鑑』は、秋田への移動を慶長六年のこととしているが、これが誤りであることは前述の『寛政重修諸家譜』などの記載からわかるであろう。

『会津鑑』、『新編会津風土記』のいずれも穂谷沢村源慶寺の条に、後に盛氏像が会津に帰り、瑞雲院に像を納めたとある。上記二書には、盛氏像が会津にもどった年の記述はないが、『異本塔寺長帳』の慶長七年の条には、この年に盛氏像が会津にもどったとしている。一方、『会津旧事雑考』慶長七年の条には

去年又盛重移秋田時玉負彼像来今歳建寺依旧瑞雲院ト云フ

とあり、「去年」とは慶長六年のこと、義広（盛重）の秋田への移動を一年誤っているが、ともかく義広（盛重）が秋田に移るとき、祐玉が盛氏像を負って来るとある。これは会津にもどったことと解され、慶長七年に寺を建て、その寺をもとのごとく瑞雲院と称したというのである。これから盛氏像が常陸へ一度移り、後義広（盛重）が秋田に移るとき、盛氏像のみは秋田に行かず会津に帰ったように受け取られる。『新編会津風土記』宗英寺の条には

（天正）十七年磨上の軍散して後義広件の木像を奉して常陸に赴けり義

広卒して後観悦と云僧又此木像を携て本郡に帰り府下の市中に庵室を結て奉祭せしを（中略）葦名家の旧臣此地に散在する者力を勸めて修理を加へ瑞雲院と号すと云慶長七年今の地に移れり

と、従来の諸記録とはやや異なった盛氏像の伝来を載せている。ここで盛氏像が義広とともに常陸に行ったことは、他書と同様のことを伝えていゝる。しかし秋田に行くことについては、その記載がない。ただ義広卒去の後、会津に帰ったという。そして庵室を結んで像を祠つて、その庵室を瑞雲院と号し、慶長七年に至り今の地、すなわち天寧寺町の現在の宗英寺の地に移ったという。さらに他書とまったく異なるのが、盛氏像を携えてきたのが観悦という僧であることで、この僧についてはここにみえるのみである。「葦名系譜」¹⁸によれば、義広の卒去は寛永八年（一六三一）のことである。義広卒去後に盛氏像が会津にもどり、慶長七年に宗英寺が現在地に移ったとする、『新編会津風土記』宗英寺の条の記事は、この部分で誤りをおかしているといえよう。盛氏像の流転について、常陸へ移ったことは諸書で一致しているが、秋田下向については相違がある。『異本塔寺長帳』、『会津鑑』、『新編会津風土記』源慶寺の条では、秋田へ行ったとしている。『会津旧事雑考』では、義広（盛重）が秋田に移るとき、像のみ会津に帰ったと解され、『新編会津風土記』宗英寺の条では、盛氏像が秋田にまで行ったという記述はない。¹⁹

この問題を考える前に、盛氏像が会津に帰った年をもう一度整理しておく。先述のように『異本塔寺長帳』慶長七年の条に

今若松「辰古ノ庵ヲ繕納像又曰瑞雲院」

とある。また『会津旧事雑考』には、慶長七年に寺を建立して瑞雲院というたあり、『新編会津風土記』宗英寺の条では、慶長七年に瑞雲院を現在の宗英寺の地に移したとある。いずれも像自体がもどるか、瑞雲院の修復、建立の年を慶長七年としている。瑞雲院の修復、建立であれば、当然、ここに盛氏像が安置されていたであろう。これらの諸書から判断するならば、慶長七年の頃に盛氏像は会津にもどっていたと考えられるであろう。

一方、佐竹家の秋田への移封は、先述のように慶長七年のことであり、さらに義広（盛重）の兄義宣が秋田郡土崎の湊城に至ったのが、同年の九月十七日のことである。この頃には、義広（盛重）も秋田に移ったものと考えられる。このとき盛氏像も秋田に移ると直ちに会津に帰ることになり、時間的にかなり切迫することになる。果して盛氏像が秋田にまで行ったのかどうか、疑問の抱かれるところである。そこで盛氏像の秋田下向の事実、さらに秋田下向があったとするならば、会津帰還の年代及びその理由などを秋田での様子をみながら次に考えてみたい。

造立後まもなく盛氏像の安置された影堂が瑞雲院と称されていたことは、先述の通りである。瑞雲院の名称を冠する寺院、あるいは一堂があるならば、そこには必ず盛氏像が安置されていたと見做すことができるであろう。常陸から秋田、角館へと葦名家の動きの中に、瑞雲院という名の寺か堂宇が見出せれば、それは盛氏像の存在を証明することになるであろう。『新編会津風土記』巻之三十二「天寧村天寧寺の条に

第十五世寛溪諱善尊が時、葦名義広の孫平三郎盛俊秋田角館より使を馳て、瑞雲院の為に寺号及法脉を請ふ、因て天寧寺と改め此寺の末山となる

とある。会津の天寧寺は、同書によると応永二十八年（一四二二）葦名盛信の建立と伝え、第九世善恕は深く盛氏の帰依をうけた僧である。その天寧寺一五世善尊のとき、義広（盛重）の孫盛俊が角館より瑞雲院のために寺号と法脉とを請うてきたのである。このことから、角館に瑞雲院が存在していたことが知られるのである。天寧寺一五世善尊は、『新編会津風土記』巻之五十四「新井田村徳昌寺の条に

承応元年会津郡南青木組天寧村天寧寺十五世善尊住せしより天寧寺の末山となる。

とあるように、承応元年（一六五二）には徳昌寺に住しているのであるから、その頃には天寧寺を退いていたものと考えられる。また義広（盛重）の

孫盛俊は、「葦名系譜」²⁰によると慶安四年（一六五二）に二十一歳で卒去している。そうすると角館瑞雲院に寺号、法脈を天寧寺善尊に請うてきたのは、慶安四年以前のこととなる。さらに佐竹家の家老の日記である『梅津政景日記』²¹の元和八年（一六二二）二月十三日の条に

平四郎様御年記ニ候間、當夏瑞雲院ニて江湖被付置度被思召候

と、平四郎、すなわち義広（盛重）の子息盛泰の年忌の廻向を行ないたい旨、願いが出されているが、その場所を瑞雲院としている。盛泰は元和二年（一六一六）七月十七日に卒去しているから、元和八年は七回忌にあたる。元和八年には、すでに盛泰の七回忌の法要を営める程度の、葦名家の菩提所としての瑞雲院が角館にあったのである。そして遅くとも慶安四年の頃までには、天寧寺と名を改めていたことが知られる。これより先、角館には葦名氏が入る前の領主である戸沢氏の菩提寺である瑞雲院という名の寺院が建っていた。そして葦名氏が角館に入ると、戸沢氏の残した瑞雲院をそのまま菩提所としたという²³。もし別な寺名であったならば、後には、天寧寺と改めているのであるから、葦名氏にふさわしい名称を用いたと思われる。ところがまったく同じ瑞雲院の名があった。これは偶然のことと思われるが、同名の寺院がありそれを名称、建物ともども葦名氏が自家の菩提所として利用したものであろう。内容的にも、葦名氏の菩提所としての瑞雲院の存在を角館にみとめることができるであろう。前述のように義広（盛重）は、慶長七年に佐竹家とともに秋田へ入り、翌八年にさらに角館に移る。盛氏像を角館にまでもない、瑞雲院の前身になる戸沢氏瑞雲院の建物に安置し、そこを同名であるために旧名通り瑞雲院と称したと考えられ、旧名を踏襲したところに盛氏像の角館下向が確かめられよう。盛氏像は、一度は角館に安置されているのであるから、会津帰還の年は、どのように早くみても義広（盛重）が角館に移った慶長八年を遡ることはないであろう。むしろ義広（盛重）の落ち着き場所が最終的に決まった、慶長八年こそ盛氏像の会津帰還の年と考えられるのである。『異本塔寺長帳』や『会津旧事雑考』などの諸書が、いずれも慶長七年を帰還の年ととらえ

ているが、これは義広（盛重）の秋田移動の年を混同してしまったために生じた誤解であろう。

義広は、後に盛重と名を改める。天正十七年以前の文書には、すべて義広の名が用いられているところから、盛重と名を改めたのは会津回復と葦名家の再興の意図があったのであろうといわれている²⁴。『異本塔寺長帳』慶長七年の条に、「又義広ハ改盛重移秋田」とあり、秋田に移る前に盛重と改名したように記されており、いずれにしても盛重改名は、義広の常陸在住の頃と考えられる。常陸江戸崎に四万五千石を豊臣秀吉より与えられていた頃は、その状況からみていまだ葦名家の再興という意欲が十分にあったものと思われる。しかし慶長七年、秋田への転封のとき、江戸崎の所領は没収されてしまう。これによって葦名家再興、会津回復の望みは大きく後退したものと考えられる。盛氏像造立の趣旨の第三には、葦名家、会津の繁栄を祈るものがあった。義広（盛重）にとって、葦名家の再興、会津の回復という望みが薄れてくることは、同時に盛氏像を守り続けることの困難さが増すことになったものと思われる。盛氏像造立は、願主である有繁の個人的意図から出発したものであったかもしれない。そのために造立当初は、有繁の住する宝寿院に安置されたのであろう。しかし瑞雲院が落命の地、小田山下に建立されると、単に有繁個人の礼拝の対象ではなくなったのではなからうか。それはより広く、葦名家、ひいては会津の繁栄を祈願する対象として、像の性格を転換していったものと考えられる。葦名家の再興を期して常陸に落ちのびた義広（盛重）にとって、盛氏像は再興を祈る本尊であったと考えられる。だからこそ常陸から秋田、角館へと、長大な流転の旅を盛氏像に強いたのであろう。その望みが絶たれた時点で、盛氏像は葦名家の旧臣たち、あるいはその旧領地である会津の人々の繁栄を祈る本尊と認識されたのではなからうか。盛氏像が会津に帰ってきた必然性は、そのようなところに求められると考えられるのである。盛氏像の会津帰還は、葦名家の再興、会津回復ともかわっていたのである。その目的がすべて消滅した時点が、盛氏像の会津帰還の年ということ

になろう。義広（盛重）が佐竹家の家臣となり、最終的に処遇が定まり角館に落ち着いた、慶長八年という年は、盛氏像の会津帰還の条件のそろった年と考えられるのである。

会津に帰った盛氏像は、先述の『異本塔寺長帳』慶長七年の条にあるように、旧瑞雲院である小田山の草庵を修繕し、そこに納められたのである。その修繕には、同じく『新編会津風土記』宗英寺の条にあるように、草名家の旧臣たちが力を合せたものと考えられる。そしてこの草庵を、もとのように瑞雲院と号したことは諸書にみえるところである。『会津旧事雑考』や『新編会津風土記』宗英寺の条では、慶長七年に直ちに寺が建てられたように記されているが、実際に盛氏像が会津に帰るのは慶長八年のことであり、さらに同時に一寺が建立されたとは考えられない。『異本塔寺長帳』の記載の通り、会津に帰った直後は、小田山の旧瑞雲院に安置されたものと思われる。その後、現在の天寧寺町の宗英寺の地に一寺が建立され、移座されたものと思われる。現宗英寺の地は、ちょうど盛氏を葬った小田山下の地とは湯川をはさんで相対する。造立趣旨の第一にある、盛氏の落命の地を顧らかにする場所として、その位置はよりふさわしいものと思われる。さらに盛氏の帰依した、善恕の住した天寧寺にも近い。宗英寺は同じく『新編会津風土記』宗英寺の条に

元和六年八月より初て瑞雲山宗英寺と号し相繼て今に至りき

とあるように、元和六年（一六二〇）には山号寺号が定まった。このことは『異本塔寺長帳』、『会津旧事雑考』の各慶長七年の条に、大沼郡尾岐窪村（現大沼郡会津高田町）龍門寺の月翁が寺とし、越前永平寺に申請し瑞雲山宗英寺と改めたとあることと関連するものであろう。そして曹洞宗龍門寺に属することになるのである。盛氏像が旧瑞雲院に仮に安置された慶長八年以後、元和六年までには現宗英寺の地にある程度の堂宇が建立されたのであろう。そこに盛氏像が移座され、元和六年、正式に寺号が決まり、曹洞宗瑞雲山宗英寺として寺観を整えたものと思われる。ここに盛氏像は、漸く安住の地を得るに至るのである。なお『新編会津風土記』宗英寺の条

には、「盛氏影堂 境内にあり」と盛氏像を安置した影堂が別に境内に建てられていたように記されているが、現在この影堂はなく、像は本堂に安置されている。

さて盛氏像を角館より会津まで守り、自らも故郷に帰ってきた祐玉、すなわち有繁は、会津にもどってから、『新編会津風土記』源慶寺の条に後又故郷に帰り、影像をば瑞雲院に納め、其身は此寺に移住し、盛信盛氏の霊牌を安置し、天寧寺九世仁庵を請て開祖とし、盛信の法名によりて源慶寺と改めしとぞ

とあるように、源慶寺に移り住むことになった。盛氏像を瑞雲院に納め、自ら瑞雲院に住むことはなく、源慶寺に退いてしまうのである。これは先述したように盛氏像の性格が、個人的な礼拝の対象から草名家、あるいは会津というより広汎な礼拝の対象へと転換してしまったことと無関係ではあるまい。会津に帰った盛氏像は、個人で守るものではなく、会津の中で守られるものと考えたのではないだろうか。自らは盛氏の位牌を拝し、さらにそれを安置し住した寺の名も、盛氏の法名による瑞雲院がすでに存するところから、盛信の法名による寺名をとったものであろう。このとき盛氏の帰依した天寧寺九世善恕を開祖としているところから、曹洞宗に転宗してしまったのであろうか。盛氏が禅宗に帰依していたことは先述した。祐玉、有繁は盛氏の帰依した同じ禅宗に転じ、源慶寺において盛氏の菩提を終生弔っていたものと考えられるのである。

むすび

草名盛氏像は、顔貌や体軀の表現に極度な形式化がみとめられる。そして人形的な表現に陥っていることも否定できないであろう。このような形式化した表現は、天正十一年（一五八三）造立の、大徳寺總見院の織田信長像などにも通じるものがある。衣冠束帯の信長像の両袖が強くはね上がった造形には、硬さもみられる。正装と平常の衣服との差はあるが、盛氏像にはこれ程の威厳や硬さはみられない。両腕を前に出し、右足を上にして

坐す造形は、概念的にとらえられている。殊に右足の処理は棒状に硬く、そこに施される衣文は直線的に彫出される。しかしこのように概念的な体軀の造形ではあるが、両腕の配置には一瞬の動作をあらわそうとする積極的な表現もうかがえ、面貌表現には像主の相貌の特色がよくとらえられている。大きい両眼、小鼻が張り、厚めの唇は横に広がりしっかりと結ばれている。さらに両眉は、眉間で接するかのようによく鋭く、ややつり上がり気味に彫られており、頬骨の張った顔貌には意志的な強さがみられる。側面観においても同様で、大きな耳にひきしまった顎、目鼻立ちの大きさには、像主の意志を象徴するような力強い造形がうかがえる。現状では黒色を呈しているが、肉身に肌色、両眼などには金泥彩を施し、さらに袴の結び紐を布製としているところなどは、人形的表現の顕著さというよりも、像の実在感をより強調しようとした意識のあらわれではなからうか。ここに坐し、今行動を起そうとする生前の盛氏の、生き生きとした姿がこの像に写されているように思われる。そしてこのような表現を実現させた背後には、やはり願主である有繁の意志が強くはたらいていたものと考えられるのである。

盛氏像は、この時代、武将の肖像がさかんに造顕された風潮の中でつくられていったもので、造立それ自体は一般的なことであったかもしれない。しかしその造立の趣旨は、厨子背面刻銘に明確化されている。それは草名家、さらにその領する会津の繁栄を祈ることを究極としていた。盛氏像の長い流転の歴史が、そのことを裏付けていよう。常陸から秋田、角館への流転は、まさに草名家再興を期すものであった。そして最後に会津にもどり、会津の繁栄を祈る本尊として安置されることになる。このような伝来の中に、盛氏像の単に武将の肖像として像主の姿を忠実に写した彫刻としての記念的な、あるいは供養などの意味ばかりでなく、神格化された祈願の対象としての性格をも見出すことができるであらう。ここにこの像が会津に安置されなければならない理由があると同時に、歴史的位置をより確かなものとする根拠があると考えられるのである。

註

- 1 『異本塔寺長帳』『会津四家合考』『会津旧事雑考』『会津鑑』『新編会津風土記』『草名家譜』厨子刻銘など。
- 2 『新編会津風土記』(大日本地誌大系 雄山閣 昭和五十九年十二月五日発行以下同じ)
- 3 『草名家譜』(『会津四家合考』歴史図書社 昭和五十五年一月三十一日発行)
- 4 『会津若松史』11文化編(国書刊行会 昭和五十六年八月二〇日発行)、『文化財日本の美術』8彫刻(第一法規 昭和五十二年九月十五日発行)など。
- 5 詳しい法量は以下の通りである。(単位cm)
 頂―顎 八・二 腹 奥 八・六
 面 幅 五・五 肘 張 一九・六
 耳 張 六・四 膝 張 二四・一
 面 奥 六・六 膝 奥 一七・七
 肩 張 一三・六 膝 高(左) 四・七
 胸 奥 七・九 (右) 五・四
- 6 厨子高 四四・三 幅 三三・三
 『草名家譜並古老物語』(『福島県史』1原始・古代・中世 昭和四四年三月三十一日発行) なお同様のことは『会津鑑』(歴史春秋社 昭和五十六年六月一日発行)巻之三『草名家譜』にも記されるが、ここでは盛氏の向羽黒築城、隠居を元亀元年(一五七〇)としている。
- 7 『会津旧事雑考』(『福島県史料集成』第四輯 昭和二十八年一月三十日発行以下同じ)
- 8 『福島県史』7古代・中世資料(昭和四一年三月三十一日発行)
- 9 註8及び『会津若松史』1第四章第二節蘆名盛氏(国書刊行会 昭和五十六年八月二〇日発行)
- 10 『異本塔寺長帳』(『会津坂下町史』Ⅲ歴史編 昭和五十四年三月三十一日発行以下同じ)永禄四年の条に『草名盛氏隠居城ヲ向羽黒岩崎ヲ築今年地形普請始』とあり、少なくとも築城時には隠居の意向があったと思われる。
- 11 厨子背面刻銘と両扉内側の刻銘では、背面刻銘の字はより鋭く、力感があるのに対して、両扉内側のものはそのような強さはなく、両者は字体が異なるようにで

ある。両扉の刻銘は後に刻まれたものとみられ、両扉とも後補のものと考えられる。

- 12 『会津旧事雑考』巻之七永禄四年の条及び註8 なおこの鉄燈籠は、今はない。
13 『新編会津風土記』巻之二十六瀧沢村八幡宮の条及び註8 なおこの鰐口は、今はない。

- 14 『新編会津風土記』巻之三十二天寧村天寧寺の条

- 15 註3 参照

- 16 『寛政重修諸家譜』巻百二十九

- 17・18 註6 参照

- 19 義広卒去後に盛氏像が会津に帰ったとする、『新編会津風土記』宗英寺の条の記載から、盛氏像が角館に行ったと解釈することもできないことはないであろう。しかしこの部分は誤りであり、ここから直ちに盛氏像の角館下向を導き出すことは難しいであろう。

- 20 註6 参照 なお「輩名系譜」では、盛俊を義勝（義広、盛重）の妾腹の子としている。

- 21 『梅津政景日記』五（大日本古記録 昭和三十四年一月二十日発行）

- 22 註6 参照

- 23 角館町 柴田正蔵氏の御教示による。

- 24 『会津若松史』1第四章第三節蘆名家の衰亡（国書刊行会 昭和五十六年八月二〇日発行）

付記

宗英寺住職時崎隆宏師には、調査に際し多大なる御便宜を賜りました。また角館町柴田正蔵氏には種々御教示を戴きました。記して謝意を表する次第です。

（福島県立博物館）